戦争体験談

青柳　恵美（昭和３年生まれ）

アカシヤの並木の丘に立つ女学校を終戦の年、昭和 20 年の春卒業しました。入学した時は戦時中でも新しい友達や校風によろこびも一入（ひとしお）、浮き浮きした楽しいこともありました。それから 4 年後に卒業し「仰げば尊し我が師の恩」を取り止めになり「海ゆかばみづくかばね、山ゆかば草むすかばね、大君（おおきみ）のへにこそ死なめ、かえりみはせじ」を高らかに歌って、かなしく淋（さび）しい別れをして学び舎を去りました。1、2 年の時は勉強のあいまに短棒投げ、なぎなたのけいこ、屋根に上って消火の練習、ホウタイまき等で、英語は一年で取り止めになり、戦争は激しくなり、笑顔は見られなくなりました。「欲しがりません勝つまでは」の言葉をかかげて、一丸となって歩んでおりました。

4 年の時は、ステンレス工場へ学徒動員に行き、制服をもらい、カーキ色のゴワゴワ木綿のモンペ姿上下でした。各部署に配列され、グラインダ（火花散っている）イモノの砂落し、工賃（事務）等男性のする仕事をさせられました。信越工場に 2 ツ投下され父は、その席を離れていて一命を取り止めました。

少女の楽しい思い出はなく、切（せつ）なくサイレンのひびきが今も残っています。卒業してすぐの 4 月 5 日に桑取（くわどり）小学校に勤務することになり、谷浜（たにはま）駅より父と一緒に山道を歩きました。20 年は大雪の年で、ビショビショ雪が 20 センチもあり、歩くたびに足をすくわれました。下宿屋は横畑（よこはた）で、学校まで 40 分も歩いて、学校は冷え冷えとして人気なく、朝 6 時には学校に着いてオルガンを弾（ひ）いたり、勉強したり、学力の無い私は努力で埋め合わせました。小 1 と 5、6 年、高等科 1、2 年の被服、音楽を教えるので必死でした。

県から汽車に乗って、谷浜より往復 6 時間歩いて 2 人の視学（しがく）が私の授業を見に来られ、日帰りされました。唯一楽しかったのは、ナベを持参して山へタケノコ採りにゆき、味噌汁を作って、またあかざつゆくさをとってお浸（ひた）しを作っておかずに食べた事です。

下宿は土口のお寺へ移り、ごはんとカボチャの半分ずつの弁当で、おかずは豆味噌いためでした。蝉（せみ）の鳴き声は今でもわびしく耳に残っています。

16 才の春です。両親は家に置いておきたくて、県にまでたのみましたが取り止めはむずかしく、致（いた）し方なく決心して赴任（ふにん）しました。その時兄は兵隊に行った後でした。早稲田大学を受けたりしていて、千原（ちはら）小学校勤務中でした。

終戦と同時に心残りの中、学校を辞めてうちに入りました。トウモロコシの粉、ジャガイモの配給で行列し、お米は配給で少しでした。衣類と替えるのがはやり、私は汽車の窓より汽車に乗り上京、姉のうちへ運びました。

サツマイモのつるが世に出ました。今耐える力は、その時に養われたと考えます。物を捨てられない習慣がずっと続いて困っています。女学校の同級生は 1 割以上、100 人中 12 人が肺結核（はいけっかく）で亡くなりました。ストマイが出ておりましたが間に合わず高値でした。

私は進学をあきらめ、洋裁(ようさい)や和服を習い、気に入らない道を歩きました。戦争の傷跡は10年以上続き、心はすさんで優しさは失われました。平和だったら少女の夢はふくらんで、明るく有意義な生活をしたと思うと残念でなりません。

若き人々よ　すべての人達よ
足を大地につけて　人々と和し
自然をまもり　愛する事を
始めましょう　そのよろこびの輪が
大きく　全世界に広がることを信じて
平和への祈りとさせていただきます

合掌